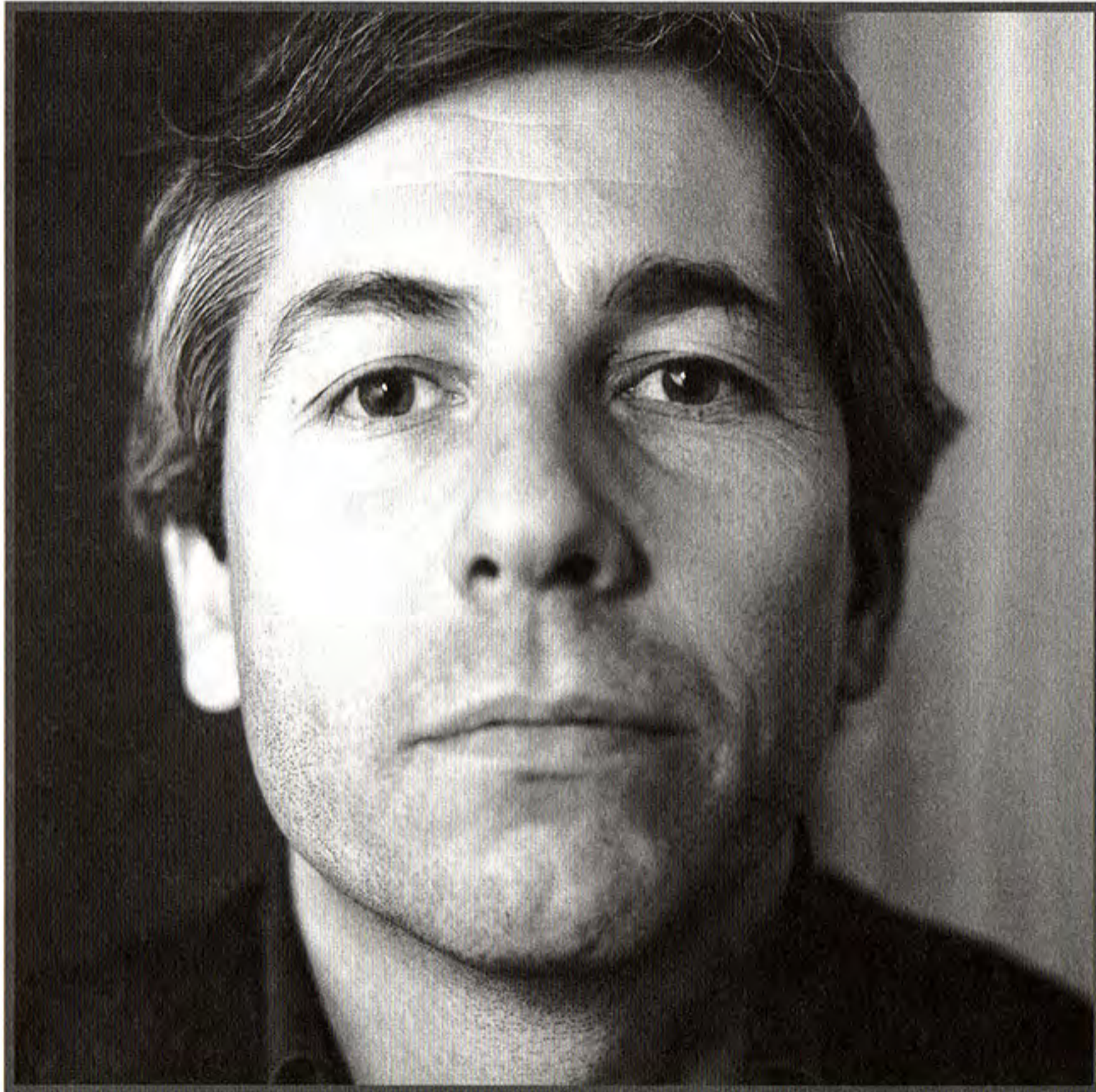


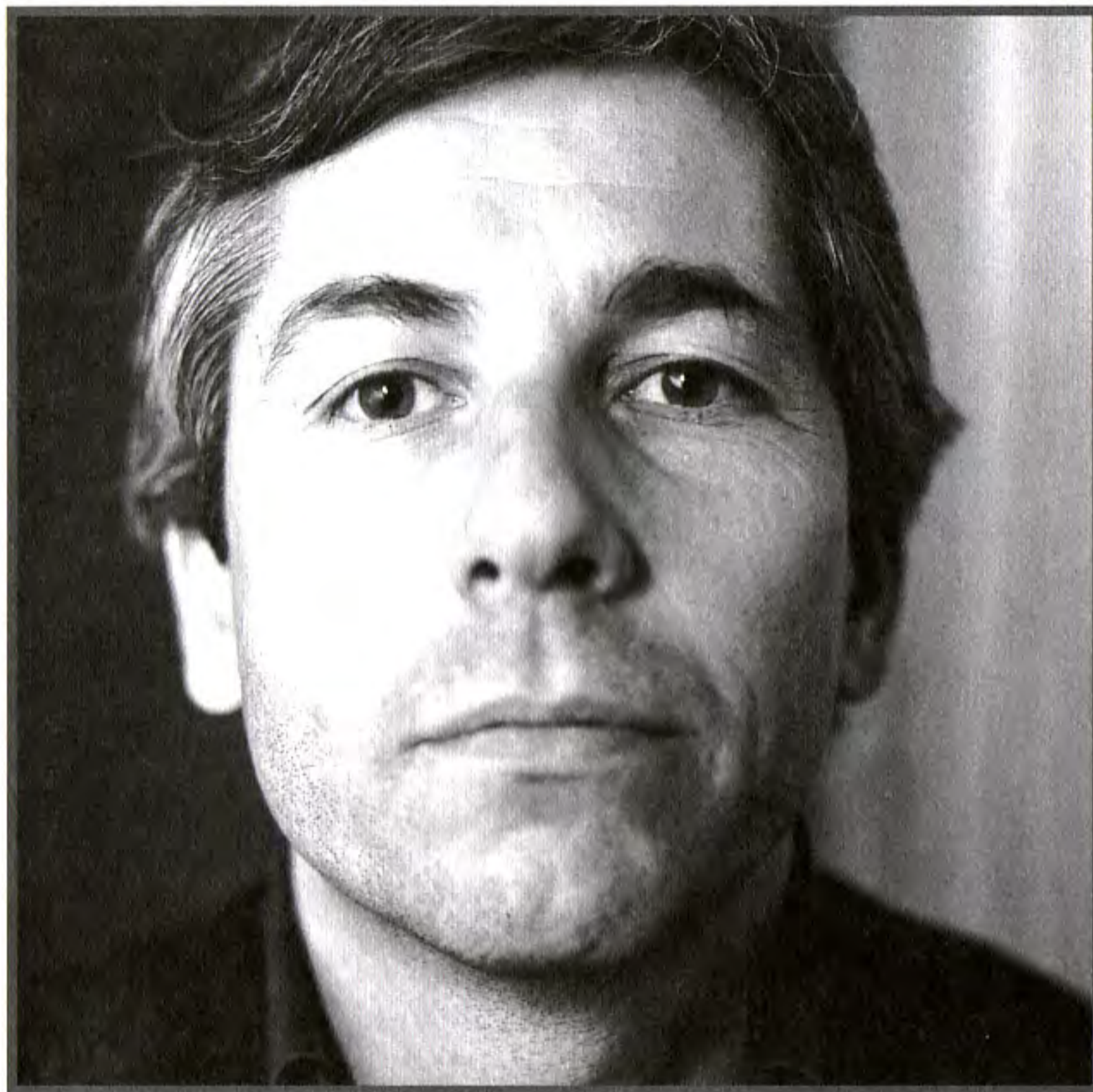
Alessandro Pesci

アレッサンドロ・ペーシのまっすぐな眼差し



Alessandro Pesci

アレッサンドロ・ペーシのまっすぐな眼差し



アレッサンドロ・ペーシ(1960年ローマ生まれ)
 C. Mazzacurati;
Un'altra vita (92),
Il toro (94),
Vesna va veloce (96),
L'estate di Davide (98),
La lingua del santo
 (00「聖アントニオと盗人たち」)
 W. Labate; *La mia generazione*
 (96「僕らの世代」),
Domenica (00)
 Mimmo Calopresti;
La seconda volta (95),
La parola amore esiste (97)
 P. Del Monte;
Tracce di vita amorosa (90),
 D. Luchetti; *Il portaborse* (91)
 L. Pieraccioni; *I laureati*(95)
 P. Virzi; *Baci e abbracci* (99)
 R. Milani;
La Guerra degli Antò (99)

ていた。機材が不足しても、多くのアイデアと意欲があった。イタリア人は大がかりなセットを組むか、でなければ…、特に撮影監督は低予算に慣れていなくて、でも現実には資金はなかったし、だから数多くの機会が無駄になった。機材が全部揃っていい仕事ができただけ、少ない機材でも映画を撮れる監督や撮影監督はまずいなかったんだ。だいたい90年まではそんなで。でも、この状況は世代交代も

促した。それまでとは違う労働基準が定められたし。今はまたいい仕事ができるようになっている。低予算も減ったけれど、仕事のやり方も尊重されるようになった」

いかにも金遣いの荒い派手なハリウッド映画と違い、かつてのイタリア映画がそんなに高価なものだったとは、ちょっと考えにくいのだが、

「イタリアの巨匠の映画の前線では数多くのイタリア映画が大きな収益を上げていたんだ。だからプロデューサーは喜劇で稼いでアントニオーニの映画を製作することもできた。ぼくが行った映画学校の創設者レンツォ・ロッセリーニによると、産業としてのシネマに芸術としてのフィルム、という二項式があってね。この両方が機能しなくなると、危機が訪れる。映画産業が機能すれば巨匠の映画も製作できる。巨匠の映画だけ作られ産業としての映画が作られなければ、誰も観に行かなくなる。昔はそのバランスが保たれていたんだ」

彼はなにしろどんどん話してくれる。論旨は明快で、ビガッツィのような理論派タイプとも、ランチのような職人気質とも異なる、気持ちの入った実践派、とでも言ったらいいのだろうか。自分自身の仕事についてもこんなふうに話してくれる。

「ただ、最大の満足を与えてくれるのは、一個の企てに参加するってことだね。映画が大作でも小品でも、よりよい作品になるために自分の貢献を必要としているっていうのは、大きな満足だ。たとえば『ぼくらの世代』はぼくにとってとても大事な作品なんだ。これは小品だけど、セットには手がかかっている。輸送車の車内のシーンはどれもまるで宇宙船でも撮るようなやり方で撮ったんだ。全部スタジオのセットだ。結果は上出来だった。誰も気づかなかったからね。ものすごく大変だったよ。美術のマッフッチと一緒に輸送車と同じ型の廃車を手に入れて、全部外してシャシーだけにして動かした。だから実際にはあんな車は存在しないんだ。恐ろしく手のこんだ作業だったけど、誰も気づかなかった。ひどく誇らしい気持ちだったね。しかもそのあいだに何度も何度もロケのカットが挿入されるんだ。これもほとんどそれとわからないけれど、スタジオで撮影した後ろの座席のしゃべりと、外で撮った運転席でのしゃべりがあって、ずっ

とそんなふうに交互にカットがつながっている。この部分も相当難しかった。でも大きな満足感が得られたよ。それ以外に車内の会話を録る手だてはなかったからね。そのままやったら地獄だったろう。夕陽が差すシーンも再現したし、トーンを抑えなければならなくて、制服も黒で、車内も暗かったから、ディテールが出るように低感度フィルムを使い、そのために強い照明が必要になった。技術的にとても、たぶん一番重要な仕事だった。目に見えないからね」

と話す口調に熱がこもる。

それから、急に、思い出したように、

「こういう小さなインタビューは嬉しいよ、夢中で仕事していると、ふり返れば実はこれだけのことをやってきていることにも気づかないんだからね。もう十年だ。十年間も撮影監督をやっているなんて考えてもみなかった」

なんてことも言う。

「忘れてたな」

そして、イタリアの生んだ優れた撮影監督たちのことを訊くと、ストラローロ、ロトゥンノ、デッリ・コッリ、スピノッティの名を挙げて

「これは今はじめて考えたことなんだけど」

と言いながら、ストラローロが、たとえばカラヴァッジョ等のイタリア絵画の伝統的美意識を継承しつつスクリーンに表したのに対して、ロトゥンノやデッリ・コッリはより映画的なイメージで表現していることを、ふたたび声を大にして語り始める。だけどその話はまた次の機会にすることにしよう。